

# 「介護」や「家事」を担う子どもたち。 「ヤングケアラー」への支援を考える。

「お母さんが病気でお手伝いしているの」

以前、私が中学校の教員をしていたときのことで、クラスに欠席がちで勉強も遅れている女の子がいました。学校でもあまり元気がありません。

ある日、その子がまた学校を休みました。気になった私は授業の合間にその子の家に行ってみました。

玄関で声をかけましたが、返答はありません。ですが裏庭で人の気配がします。

そっとまわってみると、私は意外な光景に出会いました。そこでは女の子が小さな体を精一杯背伸びさせて、洗濯物を干していたのです。

女の子は私に気づくとあわてて逃げようとしてました。

「待って、別に怒りに来たんじゃないんだよ。おうちの手伝いしているの？ えらいね。」

私はそんなふうに声をかけました。すると、女の子は消えそうな声で「お母さんが病気でお手伝いしているの……」と話してくれました。

聞いてみると、その子は病気で寝たきりのお母さんのかわりに、炊事や洗濯、お母さんの看病などの一切をしていたらしいのです。

それは私が想像もしなかったことでした。中学生が親の介護をしたり、炊事や洗濯までしている……

私はいままで、その子のことを「休みがちな子」や「勉強の遅れた子」という消極的な目でしか見てきませんでした。ですが、彼女は家では親のかわりをつとめ、精一杯働いていました。たぶん、クラスの誰よりも一生懸命に家の手伝いをしていたのです。

## 介護を担う子どもたち

私たちはいままで、「介護」と言えば中高年以降の課題だと思ってきたのかもしれませんが。

ですがよく考えてみれば、私は「介護」や「家事」を担っている子どもにも出会っていました。

親のかわりに保育園に弟や妹を迎えに行っている子がいました。心を病んだシングルマザーの母親を気遣

い、世話をしている子にも出会いました。

ある外国籍の子は、日本語の不自由な親に付き添って、学校を休んで病院に付き添っていました。

もちろん、その子たちは進んで「お手伝い」をしている場合も少なくありません。家族のケアがその子たちの人間的な成長につながることもあります。マイナスばかりとは限りません。

ですが家族のケアのために学校を欠席したり、勉強が遅れたりしたのでは、もはや「お手伝い」では済みません。友だちと遊ばず、部活動にも参加できません。進学や就職にも影響が出ることもあります。そこまでの重い役割や責任を、未成年の子どもに負わせて良いのでしょうか。

家族の介護や家事を担う18歳以下の子どもは「ヤングケアラー」と呼ばれます。イギリスで生まれた言葉です。

早くからヤングケアラーが注目されてきたイギリスでは、支援のための法律や制度が整えられています。ですが日本では、ヤングケアラーの存在はほとんど意識されてきませんでした。

少子高齢化や

晩婚化が進めば、介護の担い手は低年齢化せざるを得ません。ヤングケアラーは社会の大きな課題になっていくでしょう。そんな彼ら・彼女らを、このまま放置しておいて良いのでしょうか。

## 南魚沼市で初の実態調査

この「介護や家事を担っている子ども」は、実際にはどのくらいいるのでしょうか。



障がいや病気のある家族に代わり、買い物・料理・掃除・洗濯などの家事をしている



家族に代わり、幼い子どもが世話をしている



目を離せない家族の見守りや声かけなどの気づかいをしている



日本語が第一言語でない家族や障がいのある家族のために通訳をしている

日本ケアラー連盟資料より

昨年、新潟県南魚沼市教育委員会は大学の研究チームと連携して、日本ではじめて市内の全教職員を対象にした「ヤングケアラー実態調査」を行いました。

「これまでに教員としてかかわった中に、家族のケアをしているのではないかと感じる児童・生徒がいた(いる)か?」という設問に、4人に1人(25.1%)が「いた」と回答しました。

ケアをしている相手は、きょうだい(26人)、母(22人)、父(10人)、祖母(7人)、祖父(2人)で、中には「祖母ときょうだい」など複数の家族をダブル・ケアしている子どもも6人いました。

ケアの内容は、家事(35人)、きょうだいの世話(31人)、食事や着替えの介助(11人)、精神状態のサポート(11人)などですが、中には「小6の女子が家事や祖父の身体介助をしている」「ひとり親家庭のため親が仕事の間など中学生が祖母の身体介助を担う」という例もありました。

また、ケアのためにどんな影響があったかを聞いたところ、欠席(23人)、遅刻(21人)、宿題をしてこない(18人)、衛生面が思わしくない(12人)などの回答がありました。

「欠席や遅刻をする」「宿題をしてこない」

これらに対して学校はどう対応してきたのでしょうか。機械的に「だめな子」「だらしない家庭」などと決めつけてはこなかったでしょうか。

いま、支援教育のとりくみの中で私たちは「困った子」ではなく「困りごとを抱えた子」へと、子どもの見方を変えようとしています。ヤングケアラーの問題は、まさにおとなが気づかずに来た子どもの「困りごと」です。支援が必要な子だったのです。

ただ、そのようにとらえるには、ヤングケアラーが「いる」ことを、まず認識しなければなりません。

### 「私たちの望むこと」

では、ヤングケアラーの子どもたちをどのように支援すれば良いのでしょうか。南魚沼市教委とともに調査を行った関東学院大学の青木由美恵先生たちヤングケアラープロジェクトでは、子どもたちに代わって「ヤングケアラーが学校に望むこと」というイギリスの提言を紹介しています。

- ケアラーとしての責任が、私たちの教育や学校生活に影響してくることを認識してほしい。
- 私たちが何を必要としているか、私たちがどのような点で他の生徒のようではないのかなど私たちのことを聞いてほしい。
- 家庭での個人的問題について聞くための時間

をつくってほしい。私たちは恥ずかしくて自分から言えないこともあるから。

- 遅刻したときに機械的に罰しないでほしい。私たちは家族のことを助けていて遅れざるを得ないときがある。
- 柔軟に対応してほしい—宿題や課題をするための時間や手助けをもっとしてほしい。
- 先生たちが大学や研修でヤングケアラーや障がいにかかわる問題についての訓練を受けられることを確実にしてほしい。(一部抜粋)

どうでしょうか。遅刻や宿題などについては、学校でも柔軟に工夫できることがあるはずですよ。

子どもたちが担っているケアの役割を少しでも軽くする必要もあります。

子どもたちが介護サービスなどがあることさえ知らず、使えるのに使っていなかった支援制度もあるかもしれません。これには子どもの貧困対策の枠組みが使えるそうです。学校が“プラットフォーム”となって、スクールソーシャルワーカーを介して福祉や医療などにつなぐこともできるでしょう。

なにより、先生やまわりの大人がヤングケアラーの困難を「理解してくれている」ということが、精神的な支えにもなるはずですよ。

### ヤングケアラーへの支援制度を

日本では、いままでヤングケアラーが“いる”ことがほとんど認識されてきませんでした。当然、子どもたちへの支援を主目的とした制度もありません。

いまヤングケアラープロジェクトなどの活動などによって、ようやくヤングケアラーの存在に注目が集まり始めました。

マスコミの報道も増えてきました。2月26日の朝日新聞はヤングケアラーの問題を報じた上で「先生がまず知ってほしい」と訴えています。横浜では「横浜ヤングケアラーヘルプネット(※毎月第4水曜日午後7



▲ 2016.2.18 朝日新聞

時より「カフェテラスけみく」)も立ち上がりました。

介護は「される」側はもとより介護「する」側にも同じくらいの支援が必要です。まして介護を担うのが子どもたちであれば、そのまま放置はできません。

学校はあくまで入口です。何より国や市町村でのヤングケアラー支援の制度を確立しなければなりません。私もそのことに取り組んでいきたいと思えます。